

琉球の祖先崇拜を論ず

琉球の思潮の主なる流は何と云つても祖先崇拜である。出産、結婚、病氣、死亡、洗骨等悉く此の思想の表現にあらざるはない。従つて、琉球の如何なる問題を取り扱つても、琉球人の祖先崇拜を十分念頭において之をなすのでなければ殆んど精神がぬけてしまふ。その有意識たると無意識たるを問はない。此の意味に於て、琉球の祖先崇拜は十分に研究すべき価値があるのである。

又祖先崇拜は文化を論ずるものにとつて、極めて重大な意義を有するものである。西洋の学者も此の点に注意を怠らぬ。色々の方面から随分研究されて居る。

然るに吾人の見を以てすれば西洋学者の研究は主として漠然たるギリシヤ、ローマ人の一時といへる偉大なる事実採消者の手にかゝつた一奉する祖先崇拜かさもなくは現代蛮人の奉する祖先崇拜に限らるゝが故に彼等は未だ十分正当に祖先崇拜を了解するに到らず此の点は大いに日本、支那、琉球等の祖先崇拜に關する資料を以て彼等の意思を補ふする必要なきかと吾人愚考するのである。禮儀博士の所謂 *Witch* 内部よりの見方と云ふことは甚だ必要の様に思はれる。その内にも特に琉球の祖先崇拜は仏教、儒教より影響せらるゝこと比較的少くして究達したのであるだけ一箇興味亦深い。此の意味に於て琉球の祖先崇拜は興味ある研究問題である。

琉球に於て祖先崇拜は主としてユタによつて行はれて居る。少くもユタは祖先崇拜と極めて密なる關係を持つ

て居る。吾人は本論に入る前に先づユタの何物なるかを述べねばならぬ。ユタに関しては伊波氏が極めて有益なる研究を發表して居られるとのこと何とかして一読したいと思つて居るが未だその機会を得ない。後日吾人の意見に謬点あるを発見したら早速改める決心で本稿を専する。読者此を諒せよ。

今の処ユタの語源はまだ分らぬ。ユタがシヤベル様だと云ふ言葉のあるをや音の相似の点より見れば琉球語のユンター(シヤベロシ)から来て居るのではないかと思つたこともあるが何だか牽強附会の様に思はれる。又和漢三才圖會七卷巫の条に、

今巫女所業者奏神樂。以慰神慮。或束竹葉、以探極熱湯數注於身既心休勞倦忙々然時神明託于彼以告休咎謂之爲（由太天）其巫曰伊智云々

とある。丁度琉球語でウザシと云ふを由太天と稱するのである。琉球のユタは此の由太天より來てゐるのではあるまいか。唯然し琉球にはユタがウザシ(宗教心理)に入る前に竹葉を束ね湯にひたして身を浴びる様なこと殆んど此を聞かぬ故右説は固より異なる仮説たるに過ぎない。

ユタとは何であるかと云ふに琉球に於ける靈媒の總稱であると云ひ得る。男もあれば女もある。琉球の祖先崇拜の大立者物である。ユタあるによつて祖先崇拜は存し、祖先崇拜存するによつてユタは存する。従つて其思想内容は本論と同一である、故此處で述べない。吾人は茲に唯彼等の方法を述べればよい。

今日は事情が大いに變つて來たが元來ユタは臆言を言ふものではない。彼等は彼等強得の方法と宗教心理とを有して居つた。彼等が靈媒ならんとするには一種の儀式法を行つたものである。或は特定の物をしばらく見つめることもあれば鏡音をこもし此をじつとながめることもある。而して一種のエクスタシーの世界に入つてそれから振ひ声で過去現在未來を超越してうなり出したのである。此をウザシと云ふのである。元來ウザシとはオモロにもアマキヨガウザシヨ、シネリキヨガウザシヨ等とある如く神の御詔と云ふことであるが今日は本来の

意義を失つてユタの宗教心理に入つてワナルコトのみを云ふのである。今日は所謂アブイワカシと称する死後四十九日目の魂の靈魂送別会に於てのみ此を見るのであるが、古はユタ営業一般に此の方法によつた様に思はれる。徐英光は中山伝信録に、

女巫為人祈禱者曼聲唱誦徹夜無鼓奏

と書いて居る。此で見ると病気の時ウザシをやつたことが明瞭である。此の禱事はウザシの有様を目のあたり聞く様に巧妙に出来て居る。唯然し最後に無鼓とは冗談じゃない！ コチラは一生懸命真面目にワナつて居るを徐英光には一つの遊戯音楽と聞えたのである。

吾人がユタを右の如く解するについて尚琉球に幾多の資料が存する。文化の習気のみだりに侵すを許さぬ平安鹿島や國頭のある地方には尚現にユタの間に一種の儀法が存し沖縄一般に行はるマブイワカシの儀式にもユタは宗教心理に特有なる原塵状態の表現たるアクビを盛んに連発する。琉球語にユタのアクビをする様だと云ふ言葉さへ出来て居る位である。更に或る人がユタとなる経路を明らかにすれば右吾人の説は一層明らかになる。琉球に於てユタとなるには十中八九は病気が媒介をなすのである。熱病とか衰弱とかが原因をなして所謂靈魂を見(綱島氏の鬼神録スウェーデンボルグの陰神観察書同ニカテゴリー)以後ユタと云へる過分の天職を自覺するに至るものである。即ち多くのユタで少くとも一度はエクスタシーを有し及び此に入り長い傾向を有することは此の事實によつて吾人十分之を推理し得るのである。

尚薩末開民族に於ける靈魂が如何なることをするかを見るはユタを知るについて無益のことでもあまいから二、三の例をおげやう。

世界中で尤も有名なユタなるシベリアのシャーマンに關しランザエル氏はシベリアのシャーマンは決して他人を欺く者ではなく注意をよく集ませる一種の心理的状態者であると述べて居る。又ロンプロン死後の生活に印度のヨキキスはヨリガによりて尤も完全なる神憑なる性を所有し得るとみなさる。それは眞誠又は醉を見つめて

到達したものである云々とある。更にウイリアムスのファイジイ及びファイジイ人中に記する所琉球のユタのウザシを述べているのではないかと思はれる位よく似て居る。曰く、注點がつかく。神職は冥想に耽る。凡ての人はジツ彼を見つめる。数分間の中に彼は振ひ出す。顔が少しゆがんで来る。四肢には微動を認めることが出来る。此が次第に高じて遂に筋肉運動となる。ブル／＼ツアやく音がきこくる。今や神職に神がのりうつたのである。以後の彼の言葉動作は最早や彼の言葉動作ではなく更に神のそれなのであるとみなされるのである。

而してカオキリ声で以てコイ。アウ。イコアアわれだく(此の点琉球のマブイワカシを思起せしむ。後述す)とさげぶ。それから神職の聲は重さめる。聲は不自然になる。全体の様子が何となく狂人の様な相貌である。身体中汗ビッシヨリ。目からは涙がポロ／＼落ちる。その後様子がだん／＼元に戻つて来る。周囲を見渡してさよならと云つて席につく云々。讀者如何です。琉球のウザシをつくりではないが。此は琉球のユタがファイジイからユタ営業を学んだのでもなく又彼等に此を教へたのでもない。人種が同一だと云ふのでもない。遊離靈魂を信する未だ未開の域を脱しないが故に此處に同一の現象が存するのである。ユタのことは此の位にして本論に入らう。

祖先崇拜の起源に關しては尚色々な學説がある。或は祖先崇拜を以て根源的の宗教であるとすものがある。又然らずして動物植物崇拜の後に來たものとなすものがある。吾人は後の説を正當と信ずる。多くの未開人について研究した結果によれば先づ人間が動物植物等の自然物を崇拜した時代の存することは今日に於ては殆んど疑ふべからざる事實である。單なる理論上から考へても自然征服が未だ行われざる場合動物植物を理なるものとして拜することはありがちのことである。未だ斧を入れたことのない森林にあつて神々しい感に打たれ膝げなきに涙をこぼすこと云々ことは今日意志力知能力の比較的發達した文明人と云へども尚ありがちのことであるから尚未開の人民にとつて動物植物に対する崇拜の存することは容易に理解し得ることである。即ち吾人は原始時代には如何してもトリアニズムを前據とせざるを得ないのである。然るに農業の発見及發達が人文の中に行はれる同一のことをくりかへして居る間に自ら意志と智力を發達せしむることが出来また動物植物を人間の目的に使用する故自ら

此処に人間中心の思想を生じ動物植物崇拜はその意義を失ひ此処に人間の崇拜たる祖先崇拜を生ずるに至るのである。吾人は此の点如何してもラント等(ラボック、スペンサー)に賛せざるを得ない。ラント民族心理學論に、人間なる祖先を拜するの思想はトテムニスム(動物植物崇拜)が全然なくなつたと云ふのちやないが動物植物たる祖先がその意義を失つた所には到る處に存する云々。

とあるは実に真理を穿つて居ると思はれる。吾人は此の見地に立つが故に祖先崇拜は人間の本性に基づくとなす説は根本に於て過つてゐると思ふのである。例へば種積博士の『祖先崇拜と日本の法律』に、

之(祖先崇拜)を行ふのは子孫の自然的本能に基づく云々とあるは當を得ないと思はれる。何となればかくの如き説をとる時は今日尙トテムニスム及びその以下の文化状態にある民族は人間にあらずと云ふ結論に達するからである。

琉球の祖先崇拜も亦右の経路をとつて発展したものである。吾人は此の点「蛇犬猫に関する民族説話」と云ふ論文で此を明らかにした故再び此を例証を以て説明するを止めるがその要を述べんに琉球に於ても明らかにトテムニスムは存したが農業の發達と共に亡びて此處に祖先崇拜を生じたと云ふのである。即ち祖先崇拜は決して他より輸入したるものではなく、琉球に於て獨自に發展したものと解するのである。固より此を發展させるに於て支那(特に漢)の、日本の影響力があるがその点は決して此等外より來れる分子ではなくして琉球民族の獨自發展性(アリストテレスの所謂エンテレヒヤ)にあると云はねばならぬと思ふ。吾人は伝説によつて十分此の發展を認むることが出来るのである。吾人は上述論文に於て此を述べたのであるから此處では全然此を述べない。世界中でトテムニスム信仰から祖先崇拜に移る経過の尤も典型的状態にあるのはアメリカ・インディアンである。吾人の非常な興味をひくのは彼等の間に行はれてゐる所謂トテムニスムボールである。即ち一本の柱でその表面に動物と自己の祖先の繪が書いてあつて此を朝夕拜してゐるのである。祖先は固より拜まねばならぬが尙動物も亦拜してゐると云つた様な二重心理を示してゐるのである。吾人はトテムニスム信仰より祖先崇拜に移る過渡期には必ずかくの如きもの

が崇拜されると考へるのである。彼のエジプトのスパインクスも亦此のカテゴリトに属するのではないかと思ふ。尚三才図會を見ると支那露外民族にも此種の神像が可なりあつたらしい。例へば神像、眞龍之神其の状虎の身人の面、九首、云々。燭陰、北海外鐵山の神なり、身長百里人面電身赤色なり相輔氏漢備北柔利東にあり共々の臣なり九首人面の蛇身也等此である。此等は何れも中央アジアである故エジプト、アッシリア等の影響もあらうが尚此の種の思想に基いて起つた神像であるに違ひない。吾人は琉球に於ても亦かくの神像がなければならぬと思ふ。考し常に注意を怠らぬものであるが未だ此あるを知らぬ。読者願くは若し適當の例あらば御一報の勞を惜しめ給ふ勿れ。

歴史時代の文化は人間中心思想文化である。時にトテムニスム信仰の飛沫がその中に飛び散ることもあるがそれは單に偶発的のものでその文化に大して意義を有するものではない。故にヘブライの神話が教へる如く人間は神の像に似せて作られたものと信じ人は万物の靈長なりと言つても普通の場合決して誤りではない。然し前掲の論文にも述べた如く未開人も亦人間なりと考へ此を眼中に入れて考察する時にはさうはいかぬのである。現に人間が下等視せる動物を崇拜する思想が存するからである。故に所謂文化に於て人間中心思想はその要素をなしてその有無は文化史上著しい現象と云はねばならぬ。

此の意味に於て人間中心思想を前提にせる祖先崇拜文化とその不存在を前提せるトテムニスム文化との間には著しい相違が存すると云はねばならぬ。固より前述せる如く前者は後者より出でたるもので相關のものである故性質上相似たる点が多いのであるが然し本質上の相違として前者は全然區別せねばならぬと思ふのである。

祖先崇拜の内容そのものに関しては文學者の間に著しい意見の相違がある。ラボック、イェリク等が祖先崇拜は一種の恐怖を前提し死靈を討し込むために此を祭るのであるとなして居る区之種積教授は然らず祖先をおそるゝが故に祭るのではなく此を愛するが故に祭るのであると言つて居る。吾人は現代日本人にとつては固より恐

積教授の説が正当である。ヨーロッパ学者の説の如き殆んど一顧に値しないかの如く思はれる。然し未開人についての色々の報告を見るにヨーロッパ学者も相当十分の理由を有して唐り一顧に排する訳にはいかぬのである。それは未開人の間に死を著しく恐むの思想が案外広く強く行はれて居ると云ふことである。例へばセイロンのウエツタ族等に於ては死するや否や直ぐ採取する物もとらず他に逃げ去つて死体が全くななくなつてしまふまで又此地に帰つて来ないとのことである。かくの如き風俗は決して稀のものでなく未開の地では殆んど至る所に存するのである。我國に於ても古代天皇の崩去と共に都を遷したことは著名の事実である。又東恩納氏は隨書を引用して琉球にも死人を家内に棄てる風があつたと云つて居る(私自身は隨書そのものを非常に疑つて居る)。故に此等の事実より見れば死人を恐むの風があることは此を疑ふことは出来ない。故に種種博士の如く生きて居る間の親に對する親愛の心が死と云ふ事実のみによつて恐怖に變るとすればその恐怖は不思議な恐怖(ストレーンジファイア)であると若氣に言つて居られぬのである。

此の死者に対する矛盾せる信念は現今琉球にも幾多存する。例へば琉球に於て死者に物を供へ「来て此を享受し給へ」と祈るに、かゝはらず葬式の執りおそろしい勢で死者を追ひ又吾人の研究の結果によれば「永久に此世に出て来るなよ」と云ふ意味で煎つた五穀を死の時撒布するのである。又祖先を祭る所謂折目(クニミ)にも来り給へ——と祖先を招するに、かゝはらず遺骨を墓内に納める時には顔面を永久に暗い墓の奥に向け此の世に出て来る事が出来ない様にするのである。それ自身矛盾せる心理状態と云はねばならぬ。右学者の相反する説も要は右矛盾せる心理状態の何れに祖先崇拜は歸つてゐるか云ふ解釈見地の相違に基くのである。

此の矛盾せる心理状態は如何に解するや又その何れに祖先崇拜は基けるや。吾人は此の点に關しても亦ウントに對し右兩矛盾は歴史的発展の当然の結果として生じ而して祖先崇拜は死者を恐るゝ思想が著しく弱くなつた後に發生したものとなすものである。従つて祖先崇拜の内容そのものは恐怖ではないが然し多少の恐怖を常に伴ふものであると思ふのである。此の点は琉球の祖先崇拜の内容についても亦明瞭に裏はれてゐるのである。

一日サボターリをやつたと云ふので電車の車窓が六五人會になつたと今朝の新聞に出でゐる床を飛びおき(騒動の上では何となく早起の線だが)居白すれば九時半だ戸をあけて見ると盛んに降つてゐる。ヤー今日は学生意業だキメ込んでユル／＼曇景色を眺めつゝ本棚を草する。糊入を煮込んだ火鉢を抱た火箸をいぢりつゝペンをとる又一眼なきにあらざた。

次に吾人は祖先崇拜に関する空理をはなれて現実の内容を整理し評論しやう。専ら吾人が琉球の物知り(俗學者)について調べ得た材料に基いて此をなした。

琉球の祖先崇拜は左の根本信念の結合したものである。

- 一 靈魂の存在に対する確信
- 二 靈魂の補正に対する確信
- 三 ナザウリ(一種の遺伝)の信念

即ち死後と云へども靈魂は亡びるものではない。而してその靈魂は生きた人の供物を供すると否とにより善にもなり惡にもなつた靈魂が子孫にそのまま遺伝すると云ふのである。此が琉球に於ける祖先崇拜の組織である。節を分つてやゝ詳細に此を論じやう。

祖先崇拜に靈魂存在信仰の必要なること及び現に琉球に此が存することについては全く説くの要はない。それ程明白である。吾人は唯茲に如何なる具合に琉球人が靈魂を信するかを二、三の土俗伝説の上から此を述べれば足りると思ふ。

琉球人も亦中有を信じて居る。即ち人は死んで四十九日まで未だ彼の世に行くことが出来ず彼の世と此の世の間に居ると信ぜられてをる。而して毎日内に帰つて来ると思はれてゐる。それ故に琉球に於て死人ある時は死後四十九日まで毎月その人が生きて居るかの如く三度／＼の飲食物を供へ又仏間の側にはその人が生前使用した衣物、履物等を供へておくのである。

元來中有とは眞舎口欲往前際無實難求往由間無口止などある如く印度に発生し支那で発達した思想である。固より東亞仏教特有と稱することは出来ない。アメリカ・インディアン等にも尚獨之人の所謂ガイスター、ドルフなるものが存し中有と同じ思想が存するのである。然し琉球の中有思想は東亞仏教の影響たること言ふまでもない。

琉球人は死後四十九日に彼の世に行くと思はれてゐる。日本、支那の東亞仏教に於て言ふ如く此の四十九日に色々転生して狐になるとか木になるとか猫になるとか云ふことは殆んど信ぜられてゐる。此の意味に於て中有の思想は頗く大體琉球人に知られてゐるばかりで全体としては未だよく了解せられてゐないと思はねばならぬ。その代り琉球には獨特のマブイワカシと稱するものがある。此は色々の方面から興味深い風俗である故大體此を述べねばならぬ。此の儀式は死後四十九日目の晩おそくから行はれる。彼の世に行く靈と此の世の人の送別式なのでエタが口事の役をつとめるのである。例へばエタは死人に代つて次の横なことを云ふのである。曰く、彼の世のことは行つて見て始めて思ひ知らされた。……嗚呼私は實はこんなに早く死ぬべきではなかつたのだ。第三代の先祖の供養不足のために私は死なねばならなかつた。第六代目の先祖の如きは此の点を心配して何とか私をかばはうと思つて廻になつて生人に警告を与へた。それにもかゝらず生人は此を思ひ知ることが出来な。更に家業を病ました。尚生人は平氣なもので一向に氣付かぬ。それで万事休して私は遂に死なねばならぬことになつた——某(家族の名)も必ず此の供養不足を補ふてくれよ。でないとい私は到底極楽に行くことは出来ぬ——某生前は随分御世話になつた。有難ふ存じます。唯々我がなきあとと廻にはよく仕へておくれよ……いざさらば……。

死者の告期の辭がすむと今度はマブヤと云ふものをつける。丁度大義丸が出発の際見送りの奴が船中により続けけるのは困る故繩をたゝいてかゝることのない様にするのと同じである。此れでマブイワカシの儀式は終るのである。

尚死体なり枯骨なりは靈魂を發射するものと信じて居る。それ故に此等を直接青空の下におくことは絶対にしない。その靈が迷ひ出して空中にさまよふをおそるゝからである。例へば洗骨等の場合、日が照らなくても雨が降らなくても棺蓋の上に傘をさすを決して忘れぬ。又遺骨を移す時は必ず骨器を芭蕉布で被ふべきものとされて居り、又途中で出来るだけ休息せぬことになつて居る。甚だ面白いことには若し休息する場合は必ず骨器を置いた處から魂をとつて骨器の中に入れるのである。蓋し漏脱靈魂を恢復するの意味である。

加ふ琉球の人は生人から靈魂が飛び出すことを亦信じてゐる。ヒツクリしたりすると靈魂が脱すると考へられる。而して早く此を回収しなければ瘴氣になるとか又は死ぬ様になることとされてゐる。従つて所謂マブイワカシ即ち離脱靈魂の回収と云ふことは決して無意味のことではないのである。又骨のホコロびた衣物を着てゐるとそこから靈魂が飛び出すと思はれてゐる。彼のマブイ結子供の衣物の背につけた布巾の如きは此處から靈魂の飛び出すことのないための保障である。その他数へ挙げればいくらもある。

民族伝説の上に靈魂は如何なる形をして居るとか云ふに何だか紙に包み得、袋に入れ得る或る物の如くにも見え又一種の長い／＼糸の如くにも見える。一定した形はない様である。幾多の面白い伝説が其間存するのであるが此處には此を挙げないで置かう。

要之琉球の人が極めて原始的な靈魂の实在を信じて居ること殆んど争ふべからざる事實である。

次に吾人は靈魂の補正と云ふ点を述べやう。

琉球人の信仰によると崇拜の対象たる祖先は決して獨自存在發展性を有するものでなく生きた人によつて生活して居るものである。換言すれば生きた人が此に原料を供するによつて其種々の作用を営み善人ともなり悪人ともなるのである。何のことはない。靈魂を石炭をたぐによつて動き出す養氣機関の如く解してゐるのである。

此の点は未開人の有する靈魂思想の特質である。敢て琉球にはかぎらぬ様である。例へば印東古代ヴェッタ時代の神々の如きもさうであつた。中には随分勇猛な神様も存したが人間がソーマー(供物)を奉らねばかやうな神

でも活動力を有しなかつた。かのバラモンが勢力を得たのも一に此の民衆信念に基いたことである。(神崎氏、印度宗教史参照)

430

尚かくの如き靈魂の特質はギリシヤ神話中にも此を見出すことが出来る。例へばホメロスのオディッセイ中に次の如き趣例がある。

かくて我々は船を岸によせて羊を捕へた、それからオセアンの岸に沿つて航する。
遂に我々はキルクが告げた様な所(死人の國)にとどいた。
走りよつて剣をぬき地面に穴をあけた。
そこから凡ての死人のために供物を供する、
羊をつかまへて穴の上で首を切つた。
黒い血が流れた、エレボスから多くの死人の靈魂がソロ／＼やつて来た、
然し私はテレジ阿斯(予言者)の指揮を乞ふまで
彼等にそれを触しめなかつた。
今や私の死んだ母の靈魂もやつて来た。
私が聖イリオンに航した頃まで生きて居つたその母、
私は目に涙を浮べて彼女を見た。心からなる嫌悪の溢れ出るを察し得なかつた。
然し私はテレジアスの指揮を乞ふまで
血に觸れて下さるなど云つた。
今や親しきアベエル、テレジアスの靈魂がやつて来た。
手に黄金の樽を以て―彼は私を見知つて居つたので次の如く云つた。
汝は何故に日の光をすてゝ死の國に來たのだ

たかどけろ、私は羊の血を飲んで御前の運命を告げてやらねばならぬ。

× × ×

彼が無事だ血を飲むや否や、

彼は次の如く話し始めた。彼の有名な予言者は語した。

此の如き靈魂の特質は眞に上述に生まらず未開人一般に行はれて居る。フェチシズムの思想は殆んど全部此の種の靈魂思想に基くと云ふも過言ではない。例へばアフリカの下コンゴ土人のフェチシズムの有様を『世界の風俗』より訳出せんに、

下コンゴに於て供物は時々規則的に像に供せらる。然し彼には何等崇拜の意義はない。何等祈もさへげられない。その根本の思想は供物が像の力を漸新にすることが出来ると思はれることである云々。家畜や山羊等を屠してその血を像にぬぐこともある云々。

とある。靈魂は獨立してゐない。人間に此を補正する力が存在すると認められて居るのである。

尚我國下流社会に行はれて居るシバラレ地蔵等も亦此の中等靈魂信念の表現である。

文化発達とは一面より云へば意志生活の發展に外ならぬ。文明人と未開人との相違は眞に意志生活の發達如何にある。彼の未開人の靈魂の思想に上述の如き特質があるのは思ふに未開人意志生活の發達不十分の結果であらう。靈魂と云ひ神と云ふも實にフアイエルバツが云へる如く人間の现实生活に於て人間が創造したものになさぬからである。

琉球に於て此の靈魂の補正は主としてエタによつて行はれて居る。此を通稱願ぐわんと稱して居る。即ち願によつて悪人も善人となり願をせざれば善人も悪人となると信せられて居る。

故に琉球に於てエタが今日尚勢力を有して居ると云ふことは琉球に於ける民衆信仰の靈魂が未だ獨立且性質を有しないことに基くと云はねばならぬ。更に論を進めて云へば總論琉球人の意志生活の開程が固不十分なるがた

431 雜誌発表論文

431

めに外ならぬと論ぜざるを得ない。

最後にチヂウリの思想を説明すべき順となつた。チヂウリとは継下りの意味で遺伝と解してよい。琉球に於ては此が完全に信ぜられて居る。即ち祖先の善きも悪しきもそのまま子孫に遺伝すると信ぜらる祖先ソックリの子孫が生れると所謂マニカタ(真姿)を貰ふとかツチ分を拜領すと信ぜらる。而してその祖先の善悪は先にも述べし如く子孫が祖先によく供物を供せしや否やによつてきまるのである。(此の点今日の遺伝思想と根本的に相違して居る)馬鹿が生れるのも犯罪人が出るのも子供のないのもあるのも皆チヂウリであると云ふのである。故に子孫の幸福を増進する方法はエタを頼み又は自ら盛んに供物(願)を供して祖先の靈を禱正しておいてそのよい真姿を頂戴するに依ると云ふことになるのである。

さて此のチヂウリの思想を論評せんば最近學説と一致したる点多きを以てかくの如き思想を有することは琉球民族の誇りの如く考へる人もあるかも知れぬが此は大なる誤りである。此のチヂウリも亦未開人特有の思想である。吾人は各地の未開人に此の種の思想を多く見出し得るのである。その二・三の例をあげやう。

パチエーラ氏の『アイヌ人その説話』より訳出せんに、

出産に際して老人はよく女にこんなことを言つてきかせる。人は時々再生することがある故子供を生んだら直ぐその子供の耳を注意して見なければならぬ。耳があればそれは死んだ或る祖先が再生した証憑である。草ぶべきことである、云々。

尚前掲『世界の風俗』コンゴ土人に關しても尤も明瞭に此を見る事が出来る。曰く、

産兒に關しては唯肉體のみが新に生れたものと見られ子供の精神は古いものと信ぜらる。此は嘗つてはなくなつた祖先に屬して居つた、若しくは或る生人に屬して居るものであるにすぎないと考へられる。彼等がかく信ずるについて二つの理由がある。

第一には子供に母が何とも言はぬ前に何か言ふことを言ふ。此は確かにその生れた兒に宿つて居る古い精神が

ものを言ふのであると考へる。次に或る人に似て居るとその子供がその人の精神を受け継いで居る故に似て居るのだとなされる。而してその人は間もなく死ぬと考へられる。それ故に諸君がコンゴに於て或る子供が或る人に似て居ると云ふとその人は喜ぶのである。それは彼の靈魂が子供に受けつがれたと云ふことになるからである云々。

以上數節述ぶる所によつて記者は琉球の祖先崇拜の心理的理由を十分御了解されたことと思ふ。吾人は更に此を形式の方向から觀察せねばならぬ。

琉球の祖先は形式の点より見れば二種になる。元祖及神此れである。

(一) 元祖 比較的新しい祖先を元祖と稱する。惟かの例外地方を除いて各家仏壇を有し此に元祖を祭つて居る。元來仏壇は我國に於ては第四十代天武天皇十四年一般民間で此を作る様になつたとあるが琉球には何時頃此の風俗が生じたか今の処吾人には分らない。

(二) 神 比較的古い祖を神と稱して居る。我が國の氏神に相當する。唯我國の氏神と異なるは絶対的に血統上の祖先で他國の云ふローカルゴット即ち場所によつて区域の定まる神でないことである。

而して前者に對する特質は徹頭徹尾血統主義を以て一貫せることである。換言すれば事實上自己の祖先なる故に崇拜するのであつて事實はどうだか知らぬがともかく祖先として崇拜すると云ふのとは異なるのである。此の点は實に琉球に於ける祖先崇拜の本質をなすものである。

此の思想に基いて琉球人の祖先崇拜生活は主として神元祖の正(先祖の血統整理)と云ふ点に表はれることが多い。然るに元來嚴密に云ふ時はストリンドベルヒの悲劇中に表はれたる如く自分の父そのものが實は分るものではない。況んや時と云ふ事實抹殺者の作用を受けた後五代目の祖先、十代目の祖先と云ふものが正確に分る道理がない。且つ琉球は記録が少く、僅か數百年に廻れば王者の祖先ですら尚闇に葬られて居る故一般人民に於て自己の血統と云ふものが分明に分る筈はない。従つて神元祖の正は全くエタ、野暮の出鱈目に依頼する外なく整理

して貰へば貰ふ程愈々益々神元祖の問題が紛糾して来るのである。今日の琉球に於て此の大事業に従事して身代を演ず程の賢者も相当にあるのである。従つて琉球の祖先崇拜の現状は誠にミゼラブルのものが存するのである。祖先崇拜の上述の如く靈魂の生入による矯正と生入の靈魂よりの脚との結合して滑一したものである故その当然の結論として二事実を結果に有つのである。一つは子孫の繁栄を来さんがために祖先を崇拜せねばならぬと考へる思想であり他は祖先を崇拜せんために子孫の繁栄を計らねばならぬといふ点である。故に祖先崇拜と子孫繁栄とは二而一の關係を保つものである。琉球人が切に子を得たがる考へや太王令等に離賢理田七の中に無子まこと云ふのがある法的精神等は全く祖先崇拜の思想に基くと云はねばならぬ。此の意味に於て學者の所謂アールス信仰即ち陽物崇拜、陰部崇拜は大いに研究に値する。琉球に於て尤も有名なるは彼の瀬長の陰部崇拜であるが尚各地に子を得るために拜する拜所が存するに相違ない。此等は、是非研究せねばならぬのであるが吾人は残念ながら未だ多く資料を有しない故にこれ以上述べることは出来ない。此の点は是非讀者の親切なる御報告にあつかりたいものである。

吾人が尋常小学校に通つて居る時上村海軍大将が那覇の一小学校(たしか松山小学校だつたと思ふが?)で県下の小学校生徒のために御話をされたことがあつた。当時吾人丁度偶像に対するが如き態度で大将の顔を凝視(いや拜)したのだつた。かの朗々たる声を絶対権威として聴いたのだつた。——現にその後二、三ヶ月間は田舎の学校でも盛んに大将の演説の真似をしたものである。——その御話の中に今日も尚忘れませんが、艦上から望遠鏡で見たら幾多の白色の建造物が見える。何かと事情を知つて居る者に尋ねたら墓だとのこと。私は琉球の人が祖先をかく大事にするのを聞いて非常に美点である云々と云ふことがあつた……而して奥島に増さんは是非此の美点を維持発展させて下さいと云つた様な語であつた。当時吾々は小学校教育から特殊の印象を受けて居つた。即ち小学校國定教科書以外の内容を有する琉球の事物は何でもアチコソまべしと云ふのだつた。此んなことを先

生が云つたと云ふのではないが唯なんどなく自分の腹の中に印象が出来て居つた。丁度その矢先大将の琉球蕃雜持論、祖先崇拜美風論を聞いたので吾人の小さい頭を悩ましたことを決して少々ではなかつた。然し何も深く考へて此の矛盾を解かうと思ふこともなくそのまゝにしておいた。然るにその後我が國の思想を多少明らかにするを得、又近時琉球土俗伝説等を多少研究し得た後、かの少年時代の印象を回顧して見るに不思議なことに今頃は之と全然反対の結論に到達した。先づ第一に國定教科書以外の内容を有する琉球の事物を悉く破壊すべしと云ふ吾人少年時代の思想が根本的に誤つて居ると云ふ点である。元來此の思想は日本と古琉球を興と前提し政策的に両者を結合させなければならぬと云ふ要求に基いて發生したものであるがその大前提が全無適職なるを今日確信したからである。即ち政策的教育の琉球に於て無意義なるを知り今日その如の敵たる民族土俗伝説等(即ち國定教科書以外の内容を有する琉球の事物)が正しくかの政策教育より以上に日琉同一起源論を囀々述べて居るその能弁を聞き得たからである。例へば或る郷里を離れて遠地に長く居た者を纏(な)ける様なものである。その方法は遺棄者の國を救ふことには存せずして反対に共に幼年時代の物語を始めるにあるのである。識者の琉球迷宮を亦吾人が少年時代抱いて居つた様な思想に基くべきではなく反対に民族心理その物を十分尊重して此に基礎をおくべきである。第二には祖先崇拜の永久親繩たるべきではない点である。又上村大将の言つた如く大の國を作つて尊ぶべからざることである。吾人は此頃世界に今日より見れば三つの有言無益な大事業があると思ふ。支那の万里長城、エジプトのピラミッド及琉球の墓此である。或人言ふ「前者については世人已に云へり此に琉球の墓を入れるは如何あらん」然し吾人は唯どこまでもさう思ふのである。その余りに有言無益の徒勞を考へる時キリストの謂はゆる過去をして過去を埋むらしめよを憶ひつゝ涙が出る位此を悲しむ者である。(然し墓に関しては後に詳論しやう)

余りに長くなつた。吾人は本節に於て祖先崇拜を簡単に崇しその將來を述べて筆を止めやう。

琉球に於ける如き祖先崇拜が低い文化を前提として居る点は前数節述ぶる如によつて明らかになつたと思ふ故

更に改めて此を評する要はない。故に文化程度進むにつれて琉球の祖先崇拜は自ら亡びエタも次第にその影を没するに至る運命を有すること火を噴るよりも明らかである。如何なる時期に祖先崇拜は亡びるか云ふに先述三要素の二に対して民族が潜在意識として矛盾を感じ得る時消滅するとなさざるを得ない。三要素の中、殊に後に述べた二者即ち供物によつて靈魂を補正し得るとなす信念及び上述の如き意味のチヂウリの思想が全然無意味なるを知つた時祖先崇拜は消滅する。而して琉球に於て此の両思想に対する反対傾向は近頃著しく興起しつつある。誠に喜ぶべき現象である。各地の青年会等によく供物を制限せんとする傾がある。將來とし／＼その方針で突進してもらひたいものである。

それと共に又注目すべきは最近に於けるエタ思想の大變遷と云ふことである。此の点は沖繩全般について研究したことはないが宜野湾に於て吾人が研究したる結果によると最も明瞭にあらはれて居る。古老に聞くに世が變れば不思議なこと吾々が若い時にはエタは役場とか何んとかそんなことは云はなかつたに今頃の若いエタは役場だの何だのよい加減のことを云ふものだから我々には何のことだか分かりませんよと云ふのである。此は宜野湾では到る處で聞き得る話である。吾人は此の語謔に於てエタ思想内容の著しい變遷を伺ふことが出来るのである。即ち昔に於てはチヂウリと云へば唯それだけで満足したのが人智の進歩と共にそれのみでは満足出来ず何故と云ふ疑ひを察し而も動ともすれば吾人はよく此を聞いた祖先は常に良結果を子孫に將來さんとするのでチヂウリとか何とか云ふは是認し難いと云ふ見地に対するエタの弁解として祖先の後に立てる人格者に役場の觀念を用ひ出したのである。古琉球に於て田舎では殆んど政治的組織を知る由ないのが維新後になつて役場が民衆にも意識せられた結果エタの思想にも變化を來したものと思はれる。此の彼等の所謂役場なる觀念が次第に榮達すればインド、キリシヤ、エタヤ等の神々と同じく死者を支配する人格的神に到達し得るのである。此点に關しても亦ヴァント、テイラリ、アベバリー等が祖先崇拜は文化発達と共に当然神々の信仰に到ると述べて居る点は全く敬服の外はない。吾人は目のあたり此の大転化を實見し得るのである。

思ふに祖先崇拜は大体より云へば商業の殆んど行はれない農業時代(所謂原始經濟)の産物で骨肉の愛情に執りて他を殆んど顧みざるために陥つた一種の偏見なるが故に道徳が盛んになり必ずしも骨肉の親族のみに執着すべきにあらざるを極めた際には上述の如き矛盾は一時に潜在意識中に現はれて忽ち血統主義の祖先崇拜を消滅させるであらう。

上述の如く祖先崇拜を解するが故に最後に吾人は琉球の識者諸君に古く／＼歴史的因襲たる祖先崇拜を脱しエタの全滅を期し新しい信仰の世界を築かれんことを熱望せざるを得ない。而して歴史的因襲が根本的研究の必要を説くと共に常に此より一歩を踏み出して遺體敬服するイエリングの有名なる謬に據して次のことはを我が親しき人々に望みたい。

(民族を通して而も民族の上に)

(琉球新報、一九二〇年四月)

女人政治考・靈の島々(佐喜真興英全集)

1982年12月16日 第一刷発行(刷数2000部)

定価 110,000円

著者 佐喜真興英

発行者 株式会社 新泉社

東京都文京区本郷7-15-20

電話 03-3211602

印刷 印刷部 製本 印刷部